

若者の世界観と適応

松 井 洋*

World Concept and Adaptation of Japanese Youth

Hiroshi MATSUI

要 旨

若者の非行などの反社会的問題や引きこもりなどの非社会的問題、あるいはこれらにつながる可能性のある態度などは、価値観や性格などの個人変数で説明されることが多い。しかしこれを、個人変数ではなく、若者をとりまく社会などの環境変数によって説明できるのではないかと考えた。環境変数はここでは主観的な環境であり、若者が認識する環境世界、言い換えれば若者が自分を取り巻く環境・世界をどのように認知しているのかということを問題にした。

この目的のため、大学生女子110名を対象に、145項目からなる調査を行った。環境変数として主観的な世界観、ここでは社会観と人間観に分け、これを説明変数とした。そして、個人的な諸要因と大学における適応を被説明変数とした。

質問項目の因子分析の結果、主観的環境要因の世界観のうち社会観は5因子構造、人間観は4因子、個人的要因のうち自己認知の要因は4因子、対人関係の要因は4因子、価値観は4因子構造となった。大学の要因は、8因子構造となり、これはこれまでの研究と矛盾しない結果であった(松井・中村・田中(2010)、松井・田中・中村(2012))。以上の因子を中心に、若者の問題につながるような諸特性や大学の要因が、主観的な環境要因によってどのように説明できるか検討した。

その結果、大学の問題を非説明変数とし、個人要因と世界観を説明変数として同列に投入した分析では、大学適応は世界観によっても説明できるということが示された。また、幸福感、将来展望のような自己認知、対人適応、独立性のような対人関係の因子など、適応や問題傾向と関係のある個人的特性がかなり世界観によって説明できるということがわかった。特に、「努力が報われる社会」という社会観は前述のようなポジティブな個人特性を説明する。他方、「報われない」というようなネガティブな社会観は社会志向という価値観につながる場合もある。

以上のように、個人的な要因ではなく世界観という主観的環境要因が反社会的、非社会的問題につながるような個人特性を説明するということが示された。

キーワード：世界観、社会観、人間観、若者、大学適応

*教授 社会心理学

問題と目的

著者らは、1980年代に非行の急増と「遊び型」などと言われるような、非行の内容や動機の変化を目にして青少年の問題についての研究を始めた。この一連の研究の基本的な考え方は、非行の問題を非行少年や犯罪者の個々の問題とは考えずに、日本の青少年全体の生き方や考え方の問題と考えたということである。つまり、非行は根深い問題の上にあらわれた氷山の一角ということである。そして、問題は非行とは関係がないように見える日本の青少年の多くに共通するわが国社会に広がる問題と考えた。

日本の青少年の生き方や考え方の問題について俯瞰するために、複数の問題点・要因について国際比較研究、世代間の比較、縦断的研究を行ってきた（松井 2000, 2005, 2006, 松井他 2004, 中里・松井他 1992, 1993, 1997, 1999, 2003, 2007 島田・中里・松井 1994, 1995）。そして、問題を抑止する要因としては、道徳性（松井 2003）、価値観（松井 1999, 2008, 堀内, 中里, 松井 2004）、愛他性（松井他 1991, 1995, 1997, 1998）親子関係（松井 2000, 2001, 2002）そして、恥意識を取り上げてきている（堀内他 2004, 2005, 2008, 松井 1991, 1997, 1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 松井他 1995, 1998, 2004, 2005, 2006, 2008 永房他 2004, 中村他 2004, 2008, 中里他 1992, 1993, 1996, 1997, 1999, 2003, 2007）。

他方、現代の日本の若者の問題は、非行や犯罪のような反社会的行動だけでなく、引きこもりや不登校のような非社会的行動の問題が顕著である。そして、このような非社会的問題行動の背後にも、前に非行について述べたように、日本の若者の多くに生き方や考え方の偏向があるのではないかと考えられる。このような観点から、近年は大学生の適応の問題についても検討している。たとえば、大学生の不適応に影響する要因として、授業理解、友人関係、入学目的などについてその組み合わせ効果などを指摘している（松井他（1991）松井・中村・田中（2010）中村・松井・田中（2011）松井・田中・中村（2012））。

このように、日本の若者の問題行動の原因を若者自身の生き方や考え方に求め、いろいろな変数について検討をしてきた。他方、若者に限らず問題の原因は個体的条件とともに、環境的条件に左右される。そして、たとえば Lewin, K. の言う $B = f(P \cdot E)$ という視点、つまり問題の原因を個人要因ではなく環境要因で説明すべきだという見方からすると、われわれの研究は若者の価値観や態度、性格などの個人的特性に傾いていたとも言える。非行の原因は青少年の道徳、愛他性、恥意識にあり、そのような個人特性は親子関係と関係が深いというのが我々の研究成果である。つまり若者の問題を若者の内的特性に帰するものとしてとらえてきわけである。だが、非行や引きこもりのような若者の問題は、彼らを取りまく世界、彼らが生きてい

る社会の問題であるという視点もまた重要であるという立場も存在する。たとえば山岸（2008）のモデルでは、いじめを傍観して助けない、あるいは助けるということは個人特性ではなく、クラスに、自分の周りに助ける人がどのくらいの頻度いるのかという環境要因に左右される。つまり、いじめの問題に限らず、多くの社会問題の原因帰属において、個人に原因を求めるという帰属の誤りをおかしていると考えられる。そこで、若者の非行のような問題行動の規定因についても、若者自身の個人特性以外に環境要因、社会や人々の特徴も検討する必要があるだろう。

そこでこのような環境要因について検討するが、若者を取り巻く社会や人々についての社会学的観点、たとえば人口、就職率、進学率、所得などからの環境要因の分析も重要ではあるが、若者の問題行動の環境要因は若者自身の見かた、つまり、彼らが自分の社会や周りの人々をどのように見ているのかという主観的環境が重要であると考えられる。例えば、日本は経済的に豊かな社会だということを客観的な値で示したとしても、若者自身が貧しいと思っているのなら、日本は彼らにとっては貧しい社会なのである。若者が日本の国を貧しいと思っているのなら、実際はそうではなくとも若者は未来に希望をいだかなくなるかもしれない。客観的な値や大人の視点ではなく、若者自身の主観的な社会、人間観が重要と考える。

以上の観点から、本研究は若者の社会観、人間観などの、彼らが自分の生きる世界をどのように認知しているのかという世界観、いわば主観的環境要因が彼らの適応の諸問題の背景要因となり得る諸特性との関連について検討することが目的である。そのため、世界観と、それによって影響され問題行動の原因ともなり得る個人変数について調査をして両者の関係について検討する。また、個人変数については大学適応に関する要因（松井・田中・中村（2012））も含めて調査する。

方法

1. 調査対象者

調査対象者は、東京近郊大学生女子 110 名。

2. 実施時期

2012 年 7 月。

3. 調査項目

内容は、まず世界観として、社会観（自分の所属する社会をどのように認知しているか、たとえば「安全な社会だ」、「貧富の格差が大きい」と、人間観（自分の周りにいる人々をどの

ように認知しているか、たとえば「優しい人が多い」、「勤勉な人が多いと思う」の項目を作成した。そして、それに影響されると思われる被説明変数としての個人要因について、自己認知（自分自身についての認知）、対人関係（自分と他者との関係についての認知）、価値観（価値観、人生観）を作成し、加えて、大学について（松井 2012）に基づく大学関連項目合計 145 項目の調査を行った。調査項目は、結果の因子分析の内容のとおりである。回答は「1. あてはまる」から「4. あてはまらない」までの 4 件法で回答させた。

4. 調査方法

心理学関係の授業中に集団で調査を行なった。

結果

1. 説明変数としての世界観の因子分析

世界観についての質問項目はその内容から、社会に関するものと、その中の人々についての項目にわけることができる。そこでそれぞれの項目別に構造を明らかにするための因子分析を行った。方法は最尤法、プロマックス回転である。

社会観は表 1 のように 5 因子構造となった。なお、質問紙は「当てはまる」が 1, 「当てはまらない」が 4 なので因子の解釈は項目の値が小さいほうがその傾向が強いことを意味している。

第 1 因子は自分の判断がない、夢がある、将来暗くないという項目で「希望のある社会」因子とした。第 2 因子は安全、自由、生きていきやすい、優しいという項目にマイナスなので「生きにくい社会」の因子とした。第 3 因子は努力無駄（－）、チャンスがある、努力報われるという項目で「努力が報われる社会」の因子とした。第 4 因子は平等・公平でない、貧富の格差が大きいで「不平等な社会」の因子とした。第 5 因子は地位高い人は信用できる、強いものが幸せに・・・、弱肉強食でないという項目で「弱者に優しい社会」の因子とした。

若者の世界観と適応

表1 社会観の項目の因子分析

		因子				
		1	2	3	4	5
F1 希望ある社会						
自分の判断より周りの人がどう思うかで決めている人が多い		0.77				
夢のない国だと思う		0.68				
この社会の将来は暗いと思う		0.55				
若者が生きにくい社会だと思う		0.50				
ストレスの多い社会だ		0.49				
正義が通りにくい社会だと思う		0.44				
若者に希望を与えない社会だと思う		0.42				
みんなバラバラに生きていると思う		0.41				
物質的に豊かな社会だと思う		0.39				
一度落ちこぼれると二度と浮かび上がれない社会だと思う		0.32				
F2 生きにくい社会						
安全な社会だ			0.78			
自由でのびのびとした社会だ			0.69			
生きていきやすい社会だと思う			0.57			
弱い人にやさしい社会だと思う			0.49			
この国に生まれて幸せだ			0.43			
皆が助け合う社会だ			0.42			
F3 努力が報われる社会						
才能のない人が努力しても無駄だ				0.77		
いろいろなチャンスがある世の中だと思う				-0.65		
社会で成功するかどうかは生まれで決まる				0.60		
まじめにやっているといつかは報われる社会だと思う				-0.34		
F4 不平等な社会						
平等な社会だと思う					0.81	
公平な社会だと思う					0.77	
貧富の格差が大きい					-0.32	
F5 弱者に優しい社会						
社会的に地位の高い人たちは信用できない						0.64
結局強いものが幸せになる社会だ						0.50
弱肉強食の世の中だと思う						0.39
固有値		6.03	2.46	1.96	1.49	1.35
寄与率		20.84	7.27	5.09	4.28	3.13
因子間相関	第2因子	-0.30				
	第3因子	0.45	-0.28			
	第4因子	-0.39	0.34	-0.41		
	第5因子	0.34	-0.02	0.31	-0.17	

表2 人間観の因子分析

		因子			
		1	2	3	4
F1 利己的 (－)					
	自分勝手な人が多い	0.67			
	だいたい人は自分のことしか考えていない	0.66			
	イライラしている人が多い	0.62			
	何かをしようという意欲が足りない人が多い	0.54			
	人をいじめる人が多い	0.45			
	他の人の様子を見てからでないと自分の意見を言わない人が多い	0.44			
	若い人のほうが空気を読む人が多い	0.43			
F2 利他的 (－)					
	優しい人が多い		0.80		
	自分だけではなくほかの人のことも考える人が多い		0.78		
	勤勉な人が多いと思う		0.72		
	ほとんどの人は正直だと思う		0.47		
F3 ホンネ					
	ホンネを隠して言わない人が多い			0.89	
	ホンネとタテマエを使い分ける人が多い			0.62	
	謙虚な人が多い			0.49	
F4 後向き					
	チャレンジ精神に富んだ人がたくさんいる				0.83
	優秀な人が多い社会だと思う				0.56
	いろいろなことに自信がある人が多い			－0.33	0.37
固有値		3.70	2.92	1.80	1.22
寄与率		17.94	14.68	7.42	4.65
因子間相関	第2因子	－0.16			
	第3因子	0.34	0.34		
	第4因子	0.02	－0.15	－0.27	

人間観は表2のように4因子構造となった。第1因子は、自分勝手(－)などの項目からなり「利己的(－)」の因子、第2因子は優しい(－)、他の人のことも考える・・(－)などの項目で「利他的(－)」の因子、第3因子はホンネを隠す(－)などの項目で「ホンネ」の因子、第4因子はチャレンジ精神(－)、優秀な人が多い(－)などの項目で「後向き」の因子とした。

2. 被説明要因としての個人要因の因子分析

個人要因についての項目は内容から、自己認知に関する項目、対人関係に関する項目、価値観に関する項目に分けられる。また、個人に関する項目とは別に大学における適応についての項目がある。そして、その各項目群別に因子分析を行った。方法は前項と同じである。

自己認知に関する項目は表3の4因子構造となった。第1因子は悩む(－)、自分が嫌い(－)、

若者の世界観と適応

表3 自己認知の因子分析

		因子			
		1	2	3	4
F1 肯定的自己観					
自分自身のことで悩んだり考えたりすることがよくある		0.89			0.45
正直言って自分のことがあまり好きではない		0.74			
将来の仕事や就職のことが心配だ		0.70			
自分の将来に不安がある		0.68			
自分の能力には自信がある		-0.63			
自分は大人だと思う		-0.54			
何かをしようという意欲が足りない		0.38			
F2 幸福感（－）					
毎日の生活に満足している			1.07		
自分は幸せだと思う			0.69		
自由にのびのびと行動している			0.65		
F3 将来展望（－）					
明日は今日より良くなると思う				0.81	
がんばって何かを成し遂げた時が一番幸せだ				0.58	
自分の未来は明るい		-0.36		0.46	
自分の将来に夢がある				0.37	
F4 積極的					
リスクや失敗することを心配して積極的になれないことが多い		0.38			-0.57
自分は負け組だと思うことがある		0.35			-0.51
ほしい物がいろいろある					0.36
固有値		5.76	2.06	1.36	1.14
寄与率		16.49	23.37	6.27	3.52
因子間相関	第2因子	-0.38			
	第3因子	-0.51	0.48		
	第4因子	-0.48	0.42	0.45	

将来不安（－）などの項目であり「肯定的自己観」の因子とした。第2因子は生活満足（－）、幸せ（－）という項目で「幸福感（－）」の因子とした。第3因子は明日はよくなる（－）などの項目で「将来展望（－）」の因子、第4因子はリスク（－）、失敗（－）、負け組（－）という項目で「積極的」の因子とした。

対人関係の項目は表4の4因子構造となった。第1因子は対人接触・関係が苦手（－）という項目で「対人適応」の因子、第2因子は孤立を恐れ（－）、他者を気にして影響されやすく合わせよう（－）という項目で「独立性」の因子、第3因子は人とうまくやろうとして自分を抑えたりする傾向（－）で「自己主張」の因子とした。第2因子と第3因子は似ているようではあるが因子間相関は低い。第4因子は他者との競争に関する項目で「競争回避」の因子とした。

表 4 対人関係の因子分析

		因子			
		1	2	3	4
F1 対人適応					
人と接することがつらいと感ずることがある		0.86			
人と接するのは気が重い		0.68			
人とはあまり密着せずに適度な距離で付き合いたい		0.65			
人とのコミュニケーションが難しいと感ずることがよくある		0.64			
一人であるほうが気楽だと思ふ		0.56			
孤独感を感じることがある		0.50	0.33		
人との関係について満足している		-0.43		0.32	
他の人や社会のために役に立ちたいと思ふ		-0.39			
F2 独立性					
みんなから孤立するのは怖い		-0.30	0.78		
まわりの人たちから影響されやすい			0.74		
まわりの人に合わせようとすることが多い			0.67		
人からどう思われているか気になる			0.65		
空気を読めない人といわれるのがこわい			0.61		
人との関係に気を使っている			0.36		
しっかり自己主張するほうだ			-0.35		
F3 自己主張					
見て見ぬふりをするほうが得をする				0.67	
少数派より多数派にいたほうが安全だ				0.64	
目立ったり出しゃばったりしないほうが得だ				0.56	
人生で大切なのは人とうまくやっていくことだ				0.52	
遠慮なく自己主張したほうが得だ				-0.40	
F4 競争回避					
人生で大切なのは人との競争に勝つことだ					0.68
人と競争するのは苦手だ					-0.58
人を押しのけたり争ったりしてまで成功したいとは思わない					-0.41
固有値		4.03	3.43	2.46	1.73
寄与率		15.05	12.88	8.08	4.84
因子間相関	第 2 因子	0.12			
	第 3 因子	-0.03	0.13		
	第 4 因子	-0.01	-0.15	0.14	

価値観の項目は表 5 の 4 因子構造となった。第 1 因子は上昇志向（－）、夢（－）という項目で「上昇志向」の因子、第 2 因子は家庭、結婚（－）についての「家庭志向」、第 3 因子は社会のためになる（－）という「社会志向」の因子、第 4 因子は自分の能力・趣味を志向する（－）「自分志向」とした。

表5 価値観の因子分析

	因子			
	1	2	3	4
F1 上昇志向				
上昇志向が強いと思う	0.76			
今はがまんをしても将来の夢にかけたい	0.73			
背伸びをしたり高望みはしないほうがよい	-0.67			
人生の目標や自分の将来の生き方がはっきりしている	0.67			
自分らしさが一番大事だと思う	0.39			
F2 家庭志向				
配偶者や子どもと暮す家庭を持ちたい		0.99		
結婚はしたほうが良いと思う		0.83		
F3 社会志向				
他の人や社会のために役に立ちたいと思う			0.92	
人生で大切なのは人や社会のためになることだ			0.72	0.36
仕事をするのは生活のためだけではないと思う			0.43	
F4 自分志向				
人生で大切なのは自分の能力を発揮することだ	0.37			0.57
人生で大切なのは趣味に合った暮らしをすることだ				0.45
固有値	4.00	1.90	1.38	1.19
寄与率	16.67	25.90	8.07	6.64
因子間相関	第2因子	0.13		
	第3因子	0.55	0.18	
	第4因子	0.21	-0.10	0.20

大学についての質問項目は松井他（2012）の8因子の各々から因子負荷量の大きいものを選んだ。因子分析の結果は7因子構造となったが、松井他（2012）にならい、またその内容から第2因子を2分割して8因子構造とした。表6のように、第1因子は「大学友人」、第2因子は「大学満足」、第3因子は「授業満足」第4因子は「授業理解」、第5因子は「入学目的」、第6因子は「大学不適応」、第7因子は「勉強意欲」、第8因子は「好奇心」であった。第2因子と第3因子が分割しなかったことを除いて松井他（2012）と同様の構造であった。

表 6 大学についての因子分析

		因子						
		1	2	3	4	5	6	7
F1 大学友人								
	大学に仲の良い友人がいる	0.94						
	大学で友人と過ごすことが楽しい	0.89						
	大学に仲の良い友人がいる 2	0.89						
	いろいろと相談にのってくれる友人がいる	0.48						0.34
F2 大学満足								
	大学生活に満足している		0.80					
	大学にくるのが楽しい		0.71					
F3 授業満足								
	大学の授業は楽しい		0.89					
	大学の勉強に満足している		0.78					
F4 授業理解								
	授業の内容が難しいと思う			1.04				
	大学の勉強についていけない感じだ			0.71				
F5 入学目的								
	はっきりとした目的があって大学に入学した				1.02			
	なんとなく大学に進学した				-0.79			
F6 大学不適応								
	落ち込むことがよくある					0.93		
	疲れを感じることが多い					0.71		
	勉強のことについて教えてくれる人がほしいと思う					0.37		
F7 勉強意欲								
	もともと勉強が好きなほうだ						1.04	
	勉強が楽しい						0.58	
F8 好奇心								
	自分は好奇心が強いほうだ							0.66
	自分の人生に希望を持っている							0.62
固有値		5.19	3.12	2.11	1.66	1.17	1.05	0.91
寄与率		17.71	9.59	5.44	18.38	8.67	7.17	3.61
因子間相関	第 2・3 因子	0.40						
	第 4 因子	0.05	-0.06					
	第 5 因子	0.13	0.52	-0.23				
	第 6 因子	-0.03	-0.16	0.27	-0.18			
	第 7 因子	0.03	0.23	-0.37	0.44	-0.09		
	第 8 因子	0.21	0.29	-0.27	0.28	-0.37	0.16	

3. 説明変数としての世界観と非説明変数としての個人要因との関係

個人要因のそれぞれが、世界観によってどの程度説明できるのか、重回帰分析によって検討した。方法は基本的にステップワイズ法で、 R^2 の値がある程度大きい（少なくとも .2）もの、

説明変数は基本的に因子により、場合により個々の項目を投入して分析してみた。これらの組み合わせはかなりの数になるので以下はその一部である。

1) 自己認知要因 幸福感（－）

社会観・人間観の因子を説明変数とした重回帰分析の結果、幸福感（－）の因子、つまり「幸福でない」という気持ちは表7のように社会観・人間観の因子で説明される。 R^2 はあまり大きくないが、「生きやすい社会」、「希望のある社会」だが、「努力が報われない」という世界観、そして、「人々が利己的で後ろ向き」、という人間観が幸福でない気持ちを説明する。

表7 幸福感（－）と世界観
 $R = .575$ $R^2 = .330$

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	4.21	1.69		2.49	0.01
生きにくい社会	0.23	0.06	0.37	4.05	0.00
努力が報われる社会	0.20	0.08	0.24	2.51	0.01
利己的（－）	0.18	0.06	0.28	2.81	0.01
希望のある社会	-0.16	0.05	-0.34	-3.07	0.00
後ろ向き	-0.28	0.11	-0.22	-2.45	0.02
強者の社会	0.22	0.11	0.20	2.12	0.04

従属変数：幸福感（－）

幸福感（－）の説明要因についてももう少し検討するために、幸福感と世界観の質問項目との関係を検討すると表8の通りになる。回答は値が小さいほど「そのとおり」に近いので、「この国に生まれて幸せ」でなく、「多くの人は幸せ」でなく、「人々は謙虚でない」、「若者が生きにくい社会」で、「努力が重視されない」という世界観が幸福感が低いことにつながる。

表8 幸福感（－）と世界観項目
 $R = .659$ $R^2 = .434$

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	1.17	1.05		1.12	0.27
この国に生まれて幸せだ	0.80	0.22	0.31	3.65	0.00
多くの人は幸せな生活をしていると思う	0.65	0.19	0.28	3.33	0.00
結果よりも努力したかどうか重視される	0.52	0.20	0.21	2.64	0.01
謙虚な人が多い	0.74	0.23	0.25	3.19	0.00
若者が生きにくい社会だと思う	-0.55	0.21	-0.23	-2.68	0.01

従属変数：幸福感（－）

2) 自己認知要因 将来展望（－）

将来展望（－）の因子とは、明日は今日よりよくなるという考えである。将来展望（－）は表9のように社会観・人間観の因子で説明される。 R^2 はあまり大きくないが、「希望のある社会」だが、「努力が報われない社会」で、「不平等な社会」であるという世界観が暗い将来展望につながる。

表9 将来展望（－）
 $R = .447$ $R^2 = .200$

	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	10.55	2.66		3.97	0.00
希望のある社会	-0.20	0.08	-0.32	-2.41	0.02
生きにくい社会	0.03	0.09	0.04	0.39	0.70
努力が報われる社会	0.25	0.13	0.22	1.90	0.06
不平等な社会	-0.21	0.18	-0.13	-1.21	0.23
弱者に優しい社会	-0.06	0.15	-0.04	-0.41	0.69
利己的（－）	0.11	0.10	0.13	1.12	0.26
利他的（－）	0.15	0.14	0.13	1.10	0.28
ホンネ	0.22	0.19	0.13	1.14	0.26
後向き	-0.08	0.16	-0.05	-0.52	0.61

従属変数：将来展望（－）

3) 自己認知要因 積極的

積極的という個人因子は、リスクや失敗を恐れない、自分は負け組ではない、ということである。社会観・人間観の因子を用いた分析では明確な傾向がなかったので、質問項目を使った分析を行った結果が表10である。「チャンスのある社会」、「ストレスの少ない社会」、「物質的に豊かな社会」という社会観と、若い人に空気人を読む人が多いが読めないと言われるのは怖くはないが、ホンネを隠す人多くないという人間観が関係がある。

表10 積極的
 $R = .572$ $R^2 = .327$

	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	3.69	0.78		4.76	0.00
いろいろなチャンスがある世の中だと思う	-0.63	0.18	-0.30	-3.51	0.00
空気を読めない人といわれるのが怖い	0.54	0.16	0.30	3.44	0.00
若い人のほうが空気を読む人が多い	-0.67	0.19	-0.30	-3.44	0.00
ホンネを隠して言わない人が多い	0.58	0.24	0.21	2.35	0.02
ストレスの多い社会だ	0.47	0.22	0.19	2.15	0.03
物質的に豊かな社会だと思う	-0.37	0.20	-0.16	-1.85	0.07

従属変数：積極的

4) 対人関係 対人適応

対人適応の因子とは対人関係の因子のうち、人と居ることが苦手でないという因子である。これは、表 11 のように社会観・人間観の因子で説明される。 R^2 はあまり大きくないが、「努力が報われる社会」だが、「希望のある社会」ではなく、「人々は利他的でない」という社会観・人間観が対人適応につながる。

表 11 対人適応
 $R = .463$ $R^2 = .215$

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	9.50	2.74		3.47	0.00
努力が報われる社会	-0.46	0.22	-0.23	-2.13	0.04
利他的 (-)	-0.46	0.21	-0.22	-2.20	0.03
希望のある社会	0.20	0.11	0.18	1.84	0.07

従属変数：対人適応

5) 対人関係 独立性

独立性の因子は対人関係の因子のうち、孤立は怖くない、人から影響されない・合わせない・気にならないという気持ちの因子である。これは、表 12 のように社会観・人間観の因子で説明される。 R^2 はあまり大きくないが、「弱者に優しくない」が、「努力が報われ生きにくい社会」で、「後ろ向きで利他的な人々」という社会観・人間観が対人独立性につながる。

表 12 独立性
 $R = .484$ $R^2 = .234$

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	0.20	2.47		0.08	0.93
希望のある社会	0.03	0.08	0.06	0.45	0.65
生きにくい社会	0.13	0.08	0.17	1.53	0.13
努力が報われる社会	-0.21	0.12	-0.19	-1.70	0.09
不平等な社会	-0.10	0.16	-0.06	-0.60	0.55
弱者に優しい社会	0.34	0.14	0.24	2.34	0.02
利己的 (-)	0.05	0.09	0.06	0.54	0.59
利他的 (-)	0.12	0.13	0.10	0.89	0.37
ホンネ	0.12	0.18	0.07	0.68	0.50
後向き	-0.21	0.15	-0.14	-1.38	0.17

従属変数：集団迎合

6) 価値観 家庭志向

価値観のうち家庭志向の因子は、結婚や家庭を望む価値観である。社会観・人間観の因子を用いた分析では明確な傾向がなかったため、質問項目を使った分析を行った結果が表 13 である。「家庭を大事にする人が多く」、「男女差別がある社会」、「和の気持ちを大切にしない」、「チャンスがない社会」、「皆がバラバラ」というネガティブな社会や人々に対する見方が家庭志向につながる。

表 13 家庭志向
R = .494 R² = .244

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	2.01	0.96		2.10	0.04
いろいろなチャンスがある世の中だと思う	0.43	0.18	0.22	2.40	0.02
みんなバラバラに生きていると思う	-0.38	0.18	-0.19	-2.08	0.04
家庭よりも仕事を大事にする人が多い	0.57	0.19	0.27	3.01	0.00
男女の差別や区別がかなりある社会だ	-0.48	0.18	-0.24	-2.59	0.01
日本人は和の気持ちを大事にしている	0.48	0.20	0.24	2.47	0.02

従属変数：家庭志向

7) 価値観 社会志向

社会志向の因子は価値観の因子のうち、「人や社会のために」という生き方である。これは、表 13 のように社会観・人間観の因子で説明される。まずは「努力が報われない社会」ということである。そして、「不平等な社会」という社会観、人々が「ホンネではない」が、「利他的」で「利己的でない」。つまり、ネガティブな社会観ではあるが人間観がどちらかと言うとポジティブである。このような社会志向の価値観と関係がある。

表 14 社会志向
R = .557 R² = .310

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	6.18	1.96		3.16	0.00
希望のある社会	-0.03	0.06	-0.06	-0.50	0.62
生きにくい社会	0.01	0.07	0.01	0.14	0.89
努力が報われる社会	0.37	0.10	0.41	3.78	0.00
不平等な社会	-0.17	0.13	-0.14	-1.31	0.19
弱者に優しい社会	0.04	0.11	0.03	0.34	0.73
利己的 (-)	-0.08	0.07	-0.12	-1.14	0.26
利他的 (-)	0.17	0.10	0.18	1.65	0.10
ホンネ	0.33	0.14	0.24	2.27	0.03
後向き	-0.16	0.12	-0.12	-1.33	0.19

従属変数：社会志向

8) 大学 大学総合

大学における適応について分析するにあたって、まず、大学に関する全因子の全項目の合計得点を算出して、これを大学総合とした。

大学総合について、社会観・人間観の他に、本来は非説明因子の個人的因子である自己認知、対人関係、価値観の全因子を説明変数として重回帰分析を行った結果が表 15 である。表のように大学総合得点は社会観・人間観と個人的因子によってかなり大きく説明される。「将来展望が暗くない」、「幸福感を持つ」、対人適応など個人的要因の重みが大きい。しかし、「人々が利己的でない」、「社会が希望」がなく、「不平等」でなく、「生きにくくない」というような社会観・人間観もかなりの程度大学総合を説明する。

そこで、個人的因子を除いて、どのような社会観・人間観が大学総合得点に影響するか検討した。表 16 のようになる。説明率が低い「不平等な社会」だが、「利他的」で「利己的でない」人々と言う人間観が大学総合をある程度説明する。

表 15 大学総合
 $R = .735$ $R^2 = .540$

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	10.58	5.89		1.80	0.08
将来展望 (-)	1.12	0.26	0.39	4.37	0.00
対人適応	-0.36	0.15	-0.21	-2.35	0.02
幸福感 (-)	1.40	0.34	0.37	4.09	0.00
生きにくい社会	-0.33	0.20	-0.14	-1.71	0.09
利己的 (-)	-0.76	0.22	-0.29	-3.40	0.00
希望のある社会	0.37	0.16	0.20	2.30	0.02
不平等な社会	-0.69	0.37	-0.15	-1.85	0.07

従属変数：大学総合

表 16 大学総合（世界観・人間観因子）
 $R = .321$ $R^2 = .103$

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	16.09	5.26		3.06	0.00
利他的 (-)	0.98	0.34	0.28	2.83	0.01
不平等な社会	-1.14	0.50	-0.25	-2.29	0.02
利己的 (-)	-0.46	0.26	-0.18	-1.77	0.08

従属変数：大学総合

8) 大学 大学満足

大学に関する因子のうち大学満足の因子は「大学生活に満足」、「楽しい」という項目で大学の適応を大雑把に示していると言える。そこで大学総合と同様に社会観・人間観と個人的因子で分析すると表 17 のようになる。やはり、幸福感と対人適応ということが大学満足を説明する。しかし、「弱者に優しい社会」でないという社会観項目も関係がある。

表 17 大学満足
R = .479 R² = .230

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	2.71	0.86		3.15	0.00
幸福感 (－)	0.25	0.08	0.30	3.03	0.00
弱者に優しい社会	0.20	0.08	0.21	2.40	0.02
対人適応	-0.07	0.04	-0.20	-2.04	0.04

従属変数：大学満足

9) 大学 授業理解

大学の因子のうち授業理解については表 18 のように、「負け組」、「自信がない」というようなネガティブな自己認識と、「豊かに暮らす」、「熱心にやっていることがある」などの意欲、そして、「助け合う」、「運より努力」という世界観が影響する。

表 18 大学授業理解
R = .610 R² = .373

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	-1.17	1.20		-0.98	0.33
自分は負け組だと思ふことがある	-0.66	0.19	-0.31	-3.49	0.00
皆が助け合う社会だ	-0.61	0.18	-0.28	-3.34	0.00
うまくいくかどうかは本人の努力より運で決まる	-0.42	0.17	-0.21	-2.48	0.01
自分の能力には自信がある	0.74	0.23	0.29	3.25	0.00
人生で大切なのは豊かに暮らすことだ	-0.58	0.21	-0.23	-2.74	0.01
かなり熱心にやっていることがある	-0.45	0.17	-0.23	-2.59	0.01

従属変数：授業理解

10) 大学 入学目的

大学に関する因子のうち大学満足因子は目的を持って大学に入学したという因子である。これを社会観・人間観と個人的因子で分析すると表 19 のようになる。ここでは幸福感のような個人的要因より世界観「生きやすい」、「将来展望が明るい」、「平等」、人間観「利己的でない」ということが説明率が高い。

表 19 大学 入学目的
R = .571 R² = .326

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	1.89	1.35		1.40	0.17
将来展望 (-)	0.24	0.07	0.32	3.43	0.00
生きにくい社会	-0.21	0.06	-0.34	-3.52	0.00
幸福感 (-)	0.32	0.10	0.32	3.19	0.00
利己的 (-)	-0.14	0.06	-0.22	-2.40	0.02
不平等な社会	-0.23	0.11	-0.19	-2.01	0.05

従属変数：入学目的

11) 大学 勉強意欲

大学 勉強意欲の因子は勉強が好きということで、説明率は小さいが、「将来展望が明るい」ということと「人々が後ろ向きでない」という認識が勉強に対する意欲とつながる。

表 20 大学 勉強
R = .419 R² = .175

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t 値	有意確率
(定数)	6.55	0.91		7.23	0.00
将来展望 (-)	0.20	0.06	0.32	3.56	0.00
後向き	-0.30	0.09	-0.29	-3.22	0.00

従属変数：勉強意欲

考察

日本の若者（大学生女子）を対象に、問題につながる可能性のある諸特性が、彼らの価値観や態度、性格などの個人的要因ではなく、環境要因で説明できるのではないかと考えた。ここで言う環境要因とは若者が認知している環境である。すなわち、世界観や人間観など、彼らが

自分の生きる世界をどのように認知しているのか、言わば主観的環境によって影響されるのではないかという仮説を基に調査を行った。

この分析を行うために、調査項目を社会観、人間観の世界観、言わば主観的環境要因と、自己認知、対人関係、価値観などの個人要因、そして大学適応の6分類の質問項目についてそれぞれ因子分析を行って各分類別の構造を検討した。

その結果主観的環境要因の世界観のうち社会観は、希望ある社会、生きにくい社会、努力が報われる社会、不平等な社会、弱者に優しい社会の5因子構造になった。人間観は、利己的(-)、利他的(-)、ホンネ(-)、後ろ向きの4因子構造となった。

個人的要因のうち自己認知の要因は、肯定的自己観、幸福感(-)、将来展望(-)、積極的の4因子構造となった。対人関係の要因は、対人適応、独立性、自己主張、競争回避の4因子となった。価値観は、上昇志向、家庭志向、社会志向、自分志向の4因子構造となった。

大学の要因は、大学友人、大学満足、授業満足、授業理解、入学目的、大学不適応、勉強意欲、好奇心の8因子構造となった。これはこれまでの研究と矛盾しない結果であった(松井・中村・田中(2010)、松井・田中・中村(2012))。以上の因子を中心に、若者の問題につながるような諸特性について、主観的な環境要因によってどのように説明できるか検討した。

若者だけでなく大人でも多くの場合そうであるように、若者の心や行動の問題はその原因を若者自身の個人変数で説明されることが多い。非行については道徳心や自制心、引きこもりについては対人適応力が原因という具合である。このようなアプローチに対して、この研究は若者の問題、問題につながる可能性のある態度などが上記のような個人変数ではなく環境変数、この場合は世界観という主観的な環境、によって説明できるということが主な仮説である。

この仮説を検討するための試みとして、たとえば、大学総合と名付けた大学における適応にかかわると考えられる諸変数の合計得点を説明してみた。このとき、この研究では被説明変数である個人要因も、環境要因とともに説明変数としてまったく同列に投入してみた。個人要因と環境要因を同列にして比較するためである。結果は大学総合を説明することは将来展望や幸福感のような個人要因の説明力が高い。しかし、人々が利己的でない、社会が希望がなく、不平等でなく、生きにくいというような世界観もかなりの程度大学総合を説明する。つまり、大学における適応という問題については個人要因のみならず環境要因の影響も考慮すべき問題であることを示した。

そこで、若者の問題行動につながる可能性があると思われる諸特性について、環境要因でどのように説明できるのか検討した。個人要因として、自己認知、対人関係価値観、そして大学に関する項目を被説明変数とし、環境要因である世界観、つまり、社会観と人間観を説明変数

とした重回帰分析を行った。結果、多くの個人要因が世界観でかなり説明できるということが分かった。ただし決定率は.2～.3程度でそれほど高くはなかった。

個人要因のうち自己認知要因の幸福感因子は、これは幸福でないという気持ちだが、生きやすく、希望はあるが、努力が報われないという社会観、そして、人々が利己的で後ろ向き、という人間観が幸福でない気持ちを説明する。

将来展望の因子、これは自分の将来が暗いという因子だが、希望があるが、努力が報われない、不平等な社会であるという社会観が暗い将来展望につながる。

積極的という因子は、因子ではなく項目を説明要因とした分析だが、チャンスのある社会、ストレスの少ない社会、物質的に豊かな社会という社会観と、若い人に空気人を読む人が多いが読めないと言われるのは怖くはないが、ホンネを隠す人多くないという人間観が観連がある。

自己認知要因についての結果は。良い世界観が良い自己認知につながるという単純なものではなかった。たとえば将来の希望のない社会という認識は、むしろ自己の幸福感や明るい将来展望とは反対の関係にある。他方、努力が認められる社会だという認識は、自分の幸福感、明るい将来展望、積極性につながる。

対人関係の要因のうち対人適応の因子は、希望のある社会ではないが、努力が報われる社会、人々は利他的でないという世界観。独立性の因子は、弱者に優しくないが、努力が報われ、生きにくくない社会で、後ろ向きで利他的な人々という世界観が説明率が高い。対人関係でも共通するのは努力が報われる社会という因子が重いということである。

価値観のうち、家庭志向は、家庭を大事にする人が多く、男女差別がある関係がある社会、という家庭や女性の生き方と関係がある世界観項目と、和の気持ちを大切にしない、チャンスがない社会、皆がバラバラと、ネガティブな社会や人々に対する見方がむしろ家庭志向に関係がある。社会志向の因子は、まずは努力が報われない社会で、不平等な社会という社会観、人々がホンネではないが、利他的で利己的でない。つまり、ネガティブな社会観ではあるが人間観がどちらかと言うとポジティブという世界観が社会志向の価値観と関係がある。

大学での適応にかかわる問題について検討するために、大学に関する因子の項目を合計して大学総合という要因を試みに作ってみた。これを説明するのは、将来展望が暗くない、幸福感を持つ、対人適応など個人的要因の重みが大きい。しかし、人々が利己的でない、社会が希望がないが、不平等でなく、生きにくくないというような社会観・人間観もかなりの程度大学総合を説明する。社会観・人間観だけを用いて分析すると、不平等な社会だが、利他的で利己的でない人々と言う人間観が大学総合をある程度説明する。

大学満足の因子は「大学生生活に満足」、「楽しい」という項目で大学の適応を大雑把に示して

いると言える。そこで大学総合と同様に社会観・人間観と個人的因子で分析すると、大学総合の場合と同様に、幸福感と対人適応という個人要因が大学満足を説明する。しかし、弱者に優しい社会ではないという社会観項目も関係がある。

授業理解の因子は、全項目を用いた分析では、負け組、自信がないというようなネガティブな自己認識と、豊かに暮らす、熱心にやっていることなどの意欲、そして、助け合う、運より努力という世界観が影響する。

入学目的の因子は目的を持って大学に入学したという因子で、社会観・人間観と個人的因子で分析すると、幸福感のような個人的要因より世界観「生きやすい」、「将来展望が明るい」、「平等」、人間観「利己的でない」ということが説明率が大きい。

勉強意欲の因子は、勉強が好きということで、説明率は小さいが、将来展望が明るい、人々が後ろ向きでないという認識が勉強に対する意欲とつながる。

大学についての分析は、説明変数を世界観と、世界観+個人要因でも行った。結果は、個人要因だけでなく世界観も大学での適応と関係があるというものであった。たとえば、将来展望が明るいという社会観は、大学入学や勉強への意欲と関係がある。

この研究は若者の問題、問題につながる可能性のある要因が個人変数ではなく環境変数によって説明できるということが主な仮説である。そこで環境変数として主観的な世界観、社会観と人間観によって問題につながる可能性のある要因が説明できるかどうか検討した。その結果、個人要因と世界観を同列に投入した分析では、大学適応は世界観によっても説明できるということが示された。また、幸福感、将来展望のような自己認知、対人適応、独立性のような対人関係の因子、これらはいずれも適応や問題傾向と関係のある個人的特性と考えられるが、このような要因がかなり世界観によって説明できるということがわかった。特に、世界観のうち「努力が報われる社会」という社会についての認識は前述のようなポジティブな自己認知や対人関係、あるいは大学の入学目的が明確であったり勉強への意欲があることを説明する。「努力が報われる社会」という認識はポジティブな個人特性につながるが、他方、「報われない」という社会観は社会志向という価値観につながる。つまり、社会観がネガティブであることが社会を良くしようという動機につながる場合もある。

以上のように、個人的な要因ではなく世界観という主観的環境要因が問題につながるような個人特性を説明するということが示された。ただ、今回の研究では問題行動そのものを説明はしていないので、これが今後の課題である。

文献

- 堀内勝夫・中里至正・松井 洋・中村 真・永房典之・鈴木公啓（2005）．恥意識の構造 日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集．
- 堀内勝夫・松井 洋・中村 真・中里至正（2008）．恥意識と非行的態度に関する研究（1）恥意識の構造 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集，354-355．
- 松井 洋（1991）．青年期における愛他行動の発達とその規定因 川村学園女子大学研究紀要，第 2 巻，181-193．
- 松井 洋（1992）．大学生の学校適応と授業 態度に関する研究 川村学園女子大学研究紀要，第 3 巻第 2 号，147-165．
- 松井 洋（1997）．愛他性に関する国際比較研究—米国，中国，韓国，トルコ，日本の中学生・高校生を対象として— 川村学園女子大学研究紀要，第 8 巻第 1 号，147-165．
- 松井 洋（1998）．中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの学生・高校生を対象として— 川村学園女子大学研究紀要，第 8 巻第 1 号，147-165．
- 松井 洋（1998）．中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの愛他性の国際比較研究— *Health Sciences*, vol.14, no.2, 45-55, 日本健康科学学会．
- 松井 洋（1998）．愛他性に関する国際比較研究—日本，中国，韓国，アメリカ，トルコ，キプロス，ポーランドの中学生・高校生を対象として— 川村学園女子大学研究紀要，第 9 巻第 1 号，175-186．
- 松井 洋（1999）．日本の中学生・高校生の価値観に関する研究—日本，アメリカ，中国，韓国，トルコ，キプロス，ポーランドとの国際比較研究— 川村学園女子大学研究紀要，第 10 巻．
- 松井 洋・中里至正・石井隆之（2000）．中学生の親子の心理的距離 日本心理学会第 64 回大会論文集，190．
- 松井 洋（2001）．日本の中学生の親子関係 川村学園女子大学研究紀要，第 12 巻，第 1 号，101-114．
- 松井 洋（2002）．日本の中学生の親子関係と非行的態度 川村学園女子大学研究紀要，第 13 巻，第 1 号，105-119．
- 松井 洋（2004）．社会的迷惑行為に関する研究 川村学園女子大学研究紀要，第 15 巻，第 1 号，55-68．
- 松井 洋（2004）．少子化とバーチャルリアリティの時代の子どもの社会性 児童心理，58(2)，160-165．金子書房．
- 松井 洋（2004）．非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究 社会安全研究財団助成事業実績報告書，代表松井洋 1-21．
- 松井 洋（2005）．非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究，（共著），季刊社会安全．
- 松井 洋（2008）．現代若者の価値観 丸山久美子編 21 世紀の心の処方学 第 3 部 17, 43-56. (財)社会安全研究財団 アートアンドプレーン．
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫・石井隆之（2005）．非行的態度の抑制要因に関する研究 川村学園女子大学研究紀要，第 16 巻，第 1 号，27-44．
- 松井 洋・中里至正・石井隆之（1998）．愛他性の構造に関する国際比較研究 社会心理学研究，第 13 巻，2 号，133-142．
- 松井 洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之（1995）．愛他性の構造に関する国際比較研究 日本心理学会第 59 回大会発表論文集，173．
- 松井 洋・中里至正・中村 真・堀内勝夫・永房典之（2004）．恥意識の行動抑制効果に関する研究（4）

- 社会的迷惑行為に対する恥意識と罪悪感— 日本社会心理学会第45回大会発表論文集, 522
- 松井 洋・中里至正・中村 真・堀内勝夫・永房典之・鈴木公啓 (2005). 恥意識と道徳意識の関係 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集。
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫・石井隆之 (2006). 「子ども」—比較文化研究からみた日本の子ども— 川村学園女子大学研究紀要第17巻第1, 51-70.
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫 (2007). 恥意識に関する文化比較および世代間比較 川村学園女子大学研究紀要第18巻第1号.
- 松井 洋 (2007). 親と子の双方から見た親子関係 日本発達心理学会第8回大会発表論文集ラウンドテーブル.
- 松井 洋・六角絵里子・中村 真・堀内勝夫・中里至正 (2008). 恥意識と非行的態度に関する研究 (3) 非行及び社会的迷惑行為と恥意識との関係 日本社会心理学会第49回大会発表論文集 358-359.
- 松井 洋・中村 真・田中 裕 (2010). 大学生の大学適応に関する研究 川村学園女子大学研究紀要第21巻1号, 121-133.
- 松井 洋・田中 裕・中村 真 (2011). 大学生の大学適応に関する研究 平成22年度川村学園女子大学教育研究奨励報告書, 1-59.
- 松井 洋・田中 裕・中村 真 (2012). 大学生の大学適応に関する研究Ⅲ 川村学園女子大学研究紀要第23巻1号, 117-129.
- 永房典之・中里至正・松井 洋・中村 真・堀内勝夫 (2004). 恥意識の行動抑制効果に関する研究 (2) —非行的態度との関係— 日本社会心理学会第45回大会発表論文集 524.
- 中村 真・中里至正・松井 洋・堀内勝夫・永房典之 (2004). 恥意識の行動抑制効果に関する研究 (3) —親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響— 日本社会心理学会第45回大会発表論文集 520.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫 (2007). 子どもの意識・態度の形成因としての親子関係に関する研究 日本パーソナリティ心理学会第16回大会発表論文集, 84-85.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫・中里至正 (2008). 恥意識と非行的態度に関する研究 (2)—親子関係と恥意識の形成 日本社会心理学会第49回大会発表論文集 356-357.
- 中村 真・松井 洋・田中 裕 (2011). 大学生の大学適応に関する研究Ⅱ—入学目的, 授業理解, 友人関係でみた対象者のタイプと大学不適応との関連— 川村学園女子大学研究紀要, 第22巻第1号, 85-94.
- 中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井 洋・瀬尾直久 (1992). 非行抑止要因の文化差に関する研究・日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として (財)日工組調査研究財団.
- 中里至正・松井洋他 (2003). 非行抑制要因に関する社会心理学的研究, 平成15-16年度科学研究費補助金基盤研究 (c) (2) 研究成果報告書 研究課題番号 1384003 代表中里至正.
- Nakasato, Y. & Matstui, H., (1993). Altruistic Attitudes of Japanese Youths. *International Journal of Psychology*, vol.27, pp562.
- Nakasato, Y. & Matstui, H., (1996). A Structure of Altruistic Attitudes —A Comparison of American, Chinese, Korean, Turkish and Japanese Youths—, *International Journal of Psychology*, vol.28, pp48.
- 中里至正・松井 洋(編著) (1997). 異質な日本の若者たち, プレーン出版.
- 中里至正・松井 洋 (1999). 日本の若者の弱点, 毎日新聞社.
- 中里至正・松井 洋 (2003). 日本の親の弱点, 毎日新聞社.
- 中里至正・松井 洋 (2007). 「心のブレーキ」としての恥意識—問題ある日本の若者たち (共編著) プ

若者の世界観と適応

レーン出版.

島田一男・松井洋他（1994）. 青少年の非行的態度に関する国際比較研究 平成5年度私学振興財団学術研究報告書 代表島田一男.

島田一男・松井洋他（1995）. 青少年の非行的態度に関する国際比較研究 平成6年度私学振興財団学術研究報告書 代表島田一男.

山岸俊男（2008）. 日本の「安心」はなぜ消えたのか 社会心理学から見た現代日本の問題点 集英社インターナショナル.